

徳川吉宗の母浄円院の系譜

—大工頭中井家との関係—

藤 本 清二郎

はじめに―旧説の点検―

浄円院（本名「もん」）は紀伊徳川家第五代藩主・第八代將軍徳川吉宗の生母である。先に筆者は、先行研究に依拠して小著『紀州藩主・徳川吉宗』を著し、その後、個別論文で浄円院の出身、吉宗の母方従兄弟等について検討した^①。この論文において、諸史料の検討によつて、浄円院（落飾前は「もん」、「お紋」「門姫」と表記）は不遇の中、その母（後に冷香院）と家族三人で京都から紀州へ移動したこと、浄円院は紀州徳川家への女中奉公、吉宗（幼名「源六」）誕生により同家に包摂されたが、その系譜確定作業において作為が存在することを推定した。

この結論（本稿で新史料による新説を述べるので、先の著書・論文を以下旧説と呼ぶ）を導き出した、史料的な根拠と論定の要点は以下の通りである。（i）『寛政重修諸家譜』の巨勢氏の項には、利清の子として①女子（浄円院）・②勘左衛門（忠善）・③女子・④十左衛門（由利）が書き出されているが、①④の母は京都の女性で同腹であるが、年

齡的に挟まれた②③については不詳(記載無し)であり、①④の実父は利清ではないと推測した。(ii)延宝五、六年(一六七七、八)頃の「和歌山分限帳」には「巨勢(中井)利清八左衛門」および「巨勢勘左衛門」の名は見えないので、親子両者はその頃紀州家臣ではなかった。(iii)宝永七年(一七一〇)頃の「分限帳」に「勘左衛門」「十左衛門」の名が見え、兄弟両人は紀州藩士として抱えられていたが、兄は三百石、弟は一千石という異例(地位の逆転)の状態が見られた。(iv)「勘左衛門」は宝永七年ころには存命で奉公しており、寛政九年(一七九八)に大立寺で百回忌法要が営まれた「諦岳院殿」は元禄一二年(一六九九)に死去しており、この人物は「巨勢利清八左衛門」と推定した。(v)利清は一七世紀末まで存命であったことから、町人であり(分限帳にない)、子連れで浄円院母と再婚したと推測した。以上の五点である。

しかし、浄円院の父母等については、傍証史料に欠けるため、なお推測の域に留まらざるをえなかった。とりわけ、父と伝える「八左衛門」の系譜が推測によっており、説得性に欠ける面があった。また、近世中期に旗本となつた巨勢両家の「始原」については、最初の一滴に関する説明が依然として課題として残っていた。

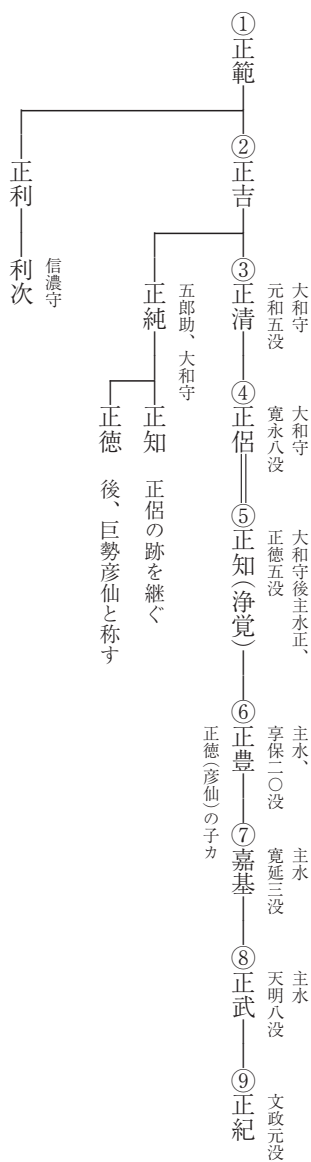
浄円院の家族の系譜については、江戸幕府京都大工頭中井家の親戚との伝承があるので、「大工頭中井家文書」の中から手がかりが得られないかと考えた。今般、中井正知氏・中井正純氏所有の国指定重要文化財「大工頭中井家関係資料」⁽²⁾の内、浄円院関係の古文書を閲覧することが出来た。これら古文書の内に、浄円院と中井家の接触の始まりに関する史料を発見した。またその後の事実を示す史料もあり、浄円院と中井家の関連について整理することができたので、以下に論述する。

【1】 中井家の系譜と正利家

(1) 寛文一〇年法名(戒名)系図について

すでに中井信彦・高橋正彦両氏によって大工頭中井家の系図が整理されているが、より整備された高橋氏作成の系図は次のようである(後半部略)。⁽⁴⁾

〈系図1〉



この系図は一九世紀初め頃迄を引用したものであるが、本稿ではさし当たり嘉基迄が関係する。これを参考として、寛文一〇年(一六七〇)という年紀の書かれた中井家系図(A-1-b7「中井家並母方系図」)⁽⁵⁾を見てみよう。□枠は引用者。○は人名略。

浄慶 中井大和守、始号孫太夫正吉、住和州法隆寺、七十七歳死
道意 従四位下中井大和守正清、住山城王都、五十五歳死、仕
大將軍家康卿寵

大雲 従五位下中井大和守正似、三十二歳死

皎玄 中井主馬正成、三十一歳死

道雲 従五位下中井

内匠頭正純、住洛陽三条六十歳死、与任益居士好

正朝 従五位下中井主水正、

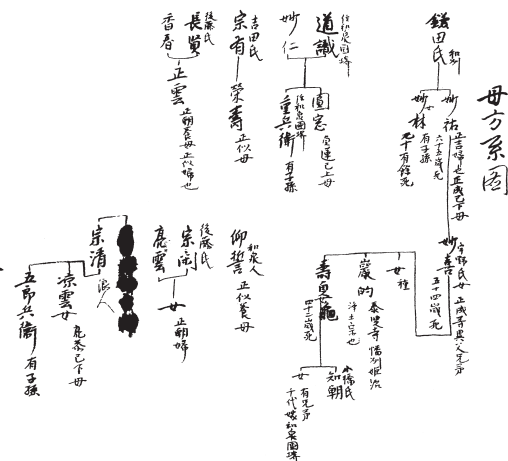
以上のように、この系図には寛文一〇年（一六七〇）正月二十七日の年紀があり、中井以云（正徳Ⅱ巨勢彦仙）の署名がある。^⑥この系図は、姻戚者の法名（過去帳等に書かれた名）^⑦を、その親子・兄弟姉妹の関係を整理し、作成したものである。ただし、正朝（正知）は存命ゆえに俗名である（正徳五年（一七一五）没）。

この系図は血縁関係・家族関係を示すことに主眼が置かれており、代々当主（家長、後見を含む）には記事が添えられているが、それは付随的な記載である。家長の継承を明らかにするという観点で作成されているのではない。また後半の「母方系図」にはそれぞれの母方出身の家を記載しており、この段階で（母方を含めた）かなり詳細な姻戚関係が把握されていたことがわかる。

年紀の信憑性であるが、宝永七年（一七一〇）の由緒書案（Article 2）によると、正朝（正知）が寛文一三丑年（一六七三）二月廿七日江戸へ参勤する際に伴って伺候した「倅長五郎」の名が明確には見えないことから、上記法名書

寛文十年正月二十七日

中井以云



出系図はそれ以前の内容が記されているものと判断される。この点を確認するのは、浄円院の母(冷香院)と子供二人の親子が紀州へ辿り着くのはおそらく延宝二、三年(一六七四、五)頃と推測されるが(後述)、この系図が浄円院家族と中井家とが接触する以前に作成されたのか否かを確定するためである。寛文一〇年であれば、浄円院家族を通じてもたらされた可能性のある、家系関係情報は含まれていないとみてよい。

さて本稿の主題は、系図中、浄慶の弟浄恩(正利)系についてである。この法名系図では、「浄慶・浄恩」兄弟が(文字の大きさもほぼ同じく)併記されているが、その横の空欄に、浄恩以下三代の名前が横に併記され、系譜を示す線で結ばれている。空いた場所に多少無理に書き込んだという書き方である(図1参照)。要するに、この系図筆者中井以云にとって、浄恩系統に関しては系図作成目的からはそれであり、しかし、初代姻戚にこの系統の家族が存在することを書き添えたと理解される。浄恩系統の三代には次のような注記が添えられている。

道恩
中井伊豆

道可
八郎右衛門、有兄弟

八左衛門
有兄弟、有子孫

八左衛門迄の存在が系図筆者(本家筋)によって知られているが、八左衛門は系図作成時の情報では未だ存命であった。この八左衛門には兄弟(姉妹を含む)があり、また「子孫」があった。このことが系図筆者(本家筋)によって知られていた。ただし、言葉の厳密な意味での「孫」ではなく、子供一般と理解される。

すなわち、中井家本家筋(浄慶)は、この程度の関心であるが、姻戚筋の浄恩系の家族や系図情報をこの程度把握していた。情報の集約はおそらく長香寺(中井正清が建立)においてなされていたのであろう。

(2) 巨勢正利系四代の記録と系譜

後に成立する旗本巨勢至信家（勘左衛門家系）の末裔である巨勢利直が、文化十一年（一八一四）頃に作成した「巨勢家譜（A-1-e-3）」によると、浄恩（正利）から四代の系図は次のようである（関係必要部分のみ）。なお、本家正吉家系の記事についてみると、正範―正吉―正清―正侶―正純迄は詳細であるが、正知については法名も触れていない。すなわち正知による正徳二年（一七一二）頃の編纂内容が直接反映されている可能性が高い（後述）。言うまでもなく、それは浄円院が中井家と接触して以降である。

〈系図3〉

正利

生国大和、甚大夫

天文六丁酉年出生、（中略）、慶長十五庚戌年十月二十三日死、七十四歳、大和国平群郡龍田村浄慶寺二葬、法名徳誉浄恩居士

利次

生国大和、五左衛（門）、信濃掾、信濃守、伊豆守

（母妻中略）

天正八庚辰年出生、同十六戊子年（中略）利次モ中井ト改、（中略）慶長十五庚戌年六月十一日任信濃掾、年月日不詳被叙從五位下任信濃守、（中略）寛永三丙寅年正月十五日死、四十七歳、大和国平群郡龍田村浄慶寺二葬、法名玄皓院法林道恩居士

利盛

生国山城、次郎八改八郎右衛門、隱居名道可

（母妻中略）

慶長十四己酉年出生、洛陽ニ浪居、後年隱居、道可改名、好龍茶道、明暦三丁酉年三月五日死、四十九

歳、洛陽長香寺二葬、法名覺園道可禪定門

策雲西堂 生国山城、寛文十一辛亥年九月二十一日死

洛陽請願寺塔頭竹林院住持

某 名乗不詳、生国山城、中井九郎右衛門、隱居名道悦(中略)

(妻中略)

元和元乙卯年出生(中略)貞享四丁卯年六月十三日死、七十三歳、洛東東福寺寺中退耕庵二葬、法名禪岩道悦禪門

某 名乗不知生国山城俗名不知

明暦二丙申年八月八日死、洛陽長香寺二葬、法名浄心宗清居士

利清

生国山城、八左衛門

妻

壺井源兵衛義高女 嵯峨大覺寺宮家臣

寛永五戊辰年出生、宝永五戊子年三月十二日死、八十一歳

法名冷香院浄誉清寿貞量信女、紀伊国若山大立寺二葬

寛永七辛未年出生、洛陽二浪居、家名中井改テ巨勢二復シ、姓ヲハ不改、寛文十二壬子年四月十六日死、四十三歳、洛陽長香寺二葬、法名光融院宣誉法岳源居士

童形 生国山城 正保四丁亥年七月二十三日死、法名意玄童子、洛陽長香寺二葬

童形 生国山城 慶安三庚寅年十月七日死、法名利覺童子

女子 明暦元乙未年八月二十日死、法名知法童女

この系図の性格を考えるため、幾つかの点について検討しておこう。まず、正利・利次・利盛三代の法名であるが、先に見た寛文一〇年（一六七〇）の法名系図の法名と一致している。利清（八左衛門）は寛文一二年に死去したと記されており、法名系図作成以降の事実が反映している。作成年代について言えば、利清の妻は「壺井源兵衛義高女」（後に冷香院）で、宝永五年（一七〇七）に死去しているが、この事実が記事に反映している。正徳二年に本家中井正知が巨勢家系をも調査して系図を編集したが（後述）、二つの事実は整合的である。

ところで、利清死去の事実や先の三代に関する諸事実はどのようにして獲得されたのであろうか。正利・利次は寛永期頃（一六三〇、四〇年代）迄本家中井家四代（正吉→正純）と業務を共にしており、情報は共有されていた可能性が高い。しかし三代目の利盛と四代目の利清はともに「洛陽ニ浪居」と記されている。おそらく、大工頭に関わる職をやめ、その表象として家名中井を巨勢に変えたのであろう。本家中井家とは疎遠になったことが推測される。

それにも関わらず情報が得られるのは長香寺を通じてである。利盛・利清はともに山城（京）生まれであり、死去の際には同寺に葬られている。利清の兄弟姉妹の多くも同寺に葬られている。一七世紀半ば頃の正利系の動静は中井家の菩提寺長香寺によって集約されていた。正徳二年頃に本家・分家の系図を調査、編纂した正知は長香寺を通じて情報を収集できたのである。次にみる正清の子供も寛文一〇年以前生まれと伝えるので、遡って、寛文一〇年法名系図の「子孫有り」の記事もこれらの情報を踏まえた記載であったと理解される。

以上のように、本章では、浄円院母子が紀州へ移動する以前の寛文一〇年頃、「浄慶・浄恩」兄弟家の血縁関係が中井家において把握されていたこと、および浄恩系の利清の系譜について確認することができた。

【2】浄円院と中井家浄覚(正知)との接触、交流

(1) 元禄一〇年頃―延享三年書状より―

系図1の七代目中井嘉基(主水)が延享三年(一七四五)一二月に作成した「中井家由緒書」(平出、欠字は省略、A-1-d-15(1))には、浄円院と中井家の接触、交流に関する記事がある。

【史料1】

(端裏書)

「延享三寅年冬、石原清左衛門へ為見、内々御所司牧野備後守殿・町奉行三井下総守殿へも御披見之由、御所司家老藤川健

次郎へも一通り為見被申候由、

中井家由緒書

覚

三通之内

「

私家筋名字之儀、先祖巨勢二御座候処、権現様江被召出、中井与相改申候、浄円院様御儀、私先祖ハ巨勢孫兵衛尉正範ト申候、(中略)正範力妻嫡子正吉六歳・弟正利二歳ニ子ヲ誘テ落行、(中略)右兄弟ノ子巨勢孫太夫正吉、弟巨勢甚太夫正利ト申候、右正利四代目巨勢八左衛門利清娘ニ而御座候、^③右八左衛門利清ハ、浄円院様紀州家江御出、唯今ノ大御所様御誕生、御十五、六ニ被為成候而 浄円院様御親類ヲ御尋被成、右八左衛門利清・浄円院様御弟巨勢六左衛門忠吉・巨勢十左衛門由利父子三人共紀州御家江被召出候、唯今ノ巨勢伊豆守ハ六左衛門忠吉子ニ而御座候、巨勢大和守ハ十左衛門由利^{後丹波守}ト申候、右丹波守子ニ而御座候、浄円院様御親類方ヲ紀州家分御尋之時、祖父主水^{浄覚事} 浄円院様より御頼ニ而祖父主水姉分ニ仕候而、紀州江御親類書等御指出被成候事ニ御座候、私家筋ハ巨勢孫太夫正吉引続、高祖父二代目巨勢藤右衛門正清^{名字中井改、後名モ大和守改}、三代目曾祖父中井大

和守正似、四代目祖父中井大和守正知<sup>後主水正改隠居、
仕、浄覚ト申候</sup>、(中略)五代目私親主水正豊、六代目私二而御座候、

右之通ニ付、畢竟浄円院様御儀、祖父浄覚姉分ニ被為成候得共、私方先祖家筋分引続申候御由緒ニ而御座候、
尤至極御内々之御尋ニ付何方へも差控罷在候得共、相認懸御目候間、外々江者御沙汰被下間敷候事、

寅十二月

この覚書は、浄円院の「私家筋」(本家中井家)は正範から始まり、六代目筆者までの系譜を述べるとともに、初代正吉の弟正利の家系である浄円院との関わりについて、同家で伝承されていることがらについて述べている。

まず、冒頭中井改家名前は巨勢家であり、浄円院は中井家の傍系の末裔巨勢八左衛門利清の娘であることが述べられている(傍線部①②)。なお、傍線部③の主語に対する述語は見あたらず、突如に挿入された感が強い。そして浄円院の話が展開する。傍線部④のように、中井嘉基は「唯今ノ大御所様(徳川吉宗)が誕生し、一五、六歳になった頃、「浄円院様御親類」の「御尋」がなされたことを紹介している。吉宗は貞享元年(一六八四)の生まれで、元禄一一年(一六九八)に一五歳となっているから、この頃浄円院の親類調査(「御尋」)が行われたことになる。

さらに注目されるのは傍線部⑥「浄円院様御親類方ヲ紀州家分御尋之時」に、「祖父主水浄覚事(五代目正知)は「浄円院様より御頼ニ而、祖父主水姉分ニ仕候而、紀州江御親類書等御指出」しがなされたことである。中井正知は浄円院を自分の姉と証言する「親類書」を紀州藩に提出した。さらに傍線部⑧のように、この事案は「尤至極御内々之御尋」で「何方へも差控」えてきた。機密事項ゆえ中井家側からは口外しなかった。この事実を延享三年段階で初めて一部に伝えられたが「外々江者御沙汰被下間敷候事(傍線部⑧)と念が押されている。調査が秘密裏に行われたことはもちろんであるが、調査内容(報告内容)も封印されていた。

しかも、これらは浄円院の「御頼」とあり、中井正知の「姉」とするよう働きかけたのは浄円院側であったことが重要である。浄円院は大工頭中井正知の姉とすることによって何をすることができたのであろうか。それは、父

と考えられる八左衛門利清との親子関係が隠れ、母・浄円院・十左衛門三人の放浪の旅が公式の記録から消されることであると推測される。

元禄一一年（二六九八）の頃、吉宗（当時新之助）は元禄九年に綱吉に御目見えし、翌一〇年に大名に取り建てられ、同一一年から同一二年にかけて、参勤・帰国を果たしている。つまり幕藩武家世界に登場したのである。浄円院は元禄九年、城下近郊の松林寺天旭和尚に依頼し、千手観音坐像によって吉宗（当時新太郎）の武運長久等の祈願、祈禱してもらっている。浄円院の出自、経歴は吉宗の昇進に障礙を生みこそすれ、有利な条件とは成らないことを浄円院は能く承知していたと思われる。

元禄一一、一二年頃にこのような「御頼」ができると言うことは、浄円院と中井正知（浄覚）は相当親しかったと推測される。この時点で初めて遠縁であると名乗り出てもこのような形では進行しないであろう。とすれば、いつ頃から両者は近づいていたのであろうか。浄円院家族が和歌山に居着き、女中奉公した時点では中井家の方が疎遠な浪人家族を相手にしないであろう。吉宗が誕生し、三〇五歳に成長した頃には浄円院の社会的地位も高まり、中井家の側もつきあうことが得策との判断も生じたことであろう。元禄一一年頃には繋がりが生じて一〇年程が経過していたのではなからうか。同時に、両者の付き合いが生じて、利清はすでに死去しており、母（後冷香院）の証言以外、利清と浄円院（当時お紋）の親子関係を証明するものはないという危うい状態であった。

一方、中井正知は寛永八年（一六三二）頃生まれで、貞享三年（一六八三）には五〇歳代であり、分別がついたであろう。しかし、本家養父正侶は寛永八年（一六三二）に死去し、その弟実父清純は承応三年（一六五四）に死去しているから、血縁関係の知識は長香寺の記録に頼らざるを得なかったであろう。このように、血縁関係の確定は流動的であったことも注意しておく必要がある。

ちなみに傍線部⑤のように、浄円院の父八左衛門利清・第六左衛門忠吉・十左衛門由利の「父子」三人が紀州藩

に仕官したとの記載は誤りである。八左衛門が仕官した痕跡はなく、先に見た系図2では寛文一二年（一六七二）に京都で死去している。また六左衛門忠吉は勘左衛門忠善の間違いである（六左衛門はその子至信の通名である）。ただしこれは延享年間の問題で、一七世紀末において間違いが流布していたか否かは別問題である。

ついで、七代目中井嘉基は何故秘密事項を口外したのであろうか。この「覚」は何故作成されたのであろうか（端裏書内容と「由緒書」との表記は作成時以後の認識を示す）。傍線部⑦のように、「私方」中井嘉基家が「先祖家筋」引続申候御由緒」であることが強調されている。後述するように、一八世紀以降中井家系譜の中に將軍職吉宗や浄円院とつながった巨勢家の系譜が書き込まれるようになり、本家・分家の両家が融合的な状況にあったため、両家の区別を明示しようとしたのではないかと考えられる。中井家の京都での格が問題となったため、中井家は將軍母方から厚遇を受け、さらに中井嘉基の先祖はその本家筋であることを強調しようとした。

ところで、前出由緒書と同時に（延享三年）に作成された「中井家由緒書」（七代目中井嘉基作成。前出とは別書。A-1-d-15(2)）には次のような記載がある（平出、欠字省略）。

〔史料2〕

- ① 一曾祖父大和守・祖父主水儀紀州御家江別而御懇意被成下候事、
 - ② 一正徳六末年、私又従弟女従浄円院様被為召、紀州へ江罷下候罷登候節、親主水母姉私儀品々拝領物仕候、
 - ③ 一享保三戌年、浄円院様紀州へ江戸表江御引越被為遊候已後、享保五子年二月私姉義江戸表江被召出、罷下り候処、御中臈相勤候様被仰付、浄円院様御側御奉公相務罷在、
- 其後浄円院様為御意巨勢大和守養妹二仕、御小姓組岡部鞆負方江嫁申候処、（以下略）

第一条目の祖父は五代目中井正知であり、同人が浄円院と関係が深かったことはすでに見たとおりである。しかし曾祖父は四代目正侶（正以）ということになり、正侶は寛永八年（一六三二）に死去しており、紀州藩とは未だ縁が

ない。この点は不正確で、誇張した表記と思われる¹⁰⁾。

第二条目によれば、浄円院は正徳六年に中井家の「私」(嘉基)の「又従弟女」が紀州へ招待され、その上、京都中井家の正豊とその妻(嘉基の母)、娘 嘉基姉¹¹⁾ お町に贈物が渡された。吉宗の將軍宣下の前か後かは不詳であるが、そのような状況下で浄円院は京都中井家とさらなる関係深化を図った。

第三条目が注目される。吉宗が將軍に就任し、浄円院が江戸へ移住した後、享保五年(一七二〇)、中井正豊の娘が浄円院によって江戸城二之丸「御中臈」に取りたてられ、「浄円院様御側御奉公相務」めた。元禄時代の正知の証言(前述)に対する恩返しであるとともに、浄円院の周囲に知己を配置しようとした。これは浄円院の差配であったとみられる。吉宗は多くの紀州藩士を江戸城に連れて行き、権力基盤を固めようとしたが、母もそのような奥向きの政策を採った。その際、中井家が人材を提供した。

ついで、享保一〇年(一七二五)一二月岸和田藩主岡部美濃守従弟岡部長豊(縫殿)子岡部鞆負(勝盈、一二五歳、高二千石)と中井正豊(主水、正知養子)娘お町の縁組が始められた(A-2-a-76(7))。浄円院に仕えていたお町は中井正豊の娘(中井嘉基の姉)で、いったん巨勢利啓の妹にして縁組を進めた¹²⁾。翌年三月～五月に、巨勢至信・利啓と中井正豊の手紙により、その準備が進められた様子が分かる(A-2-a-76(1)～(6))。(享保一〇年)一二月二八日付け中井正豊あて利啓書状(A-2-a-76(8))によると、「二之丸」(浄円院)がお町の「御暇」を許可したとある。また縁組話の進展について、浄円院付年寄小田から浄円院御意向が中井正豊に伝えられてくる(A-2-a-76(6))。浄円院は同年六月に死去するが、亡くなるまでに婚家を決めたいと考えていたのではなかろうか。

(2) 正徳二年の中井家系図改め

中井家では延宝二年(一六七四)由緒書が作成され(A-1-a-1)、天和三年(一六八三)に天和三年(一六八三)京都町

奉行前田安芸守・井上志摩守へ由緒書を提出しつゝる(A-1-a-7)。宝永七年(一七一〇)十一月にも由緒書案が作成された(A-1-a-10)。「浄覚様御時代御調被成置明細由緒書案」(包紙)と後記されているように作成者は中井家五代目の正知である。袖に「一」「二」「三」と記された三通の由緒書案には、同家三代目正清、四代目正侶(正以)、五代目正知(自身、通称「主水」・「浄覚」)およびその倅源八郎⁽¹²⁾の事績が書き出されている(A-1-a-6-(1)~(3))。文面には年紀がないが、記事の下限が元禄一二年(一六九九)であるから、宝永七年の案文の可能性がある。

この頃、正知はすでに八〇歳近くになっていたが、上記の由緒書の内容のみでは不充分とみて、その後には同家系図の再検討、同家の歴史の再編集に取りかかった。正徳元年(一七一二)と推定される正知(浄覚)の書状案(下書)がある(A-1-d-9)。

[史料3]

(端裏書)

「巨勢十左衛門様 中井浄覚 十月五日」

某系図書改可申旨、同様浄円院様へも申進候へ共、拙者切々持病指出、延引仕、今程ハ気分能御座候故書可申与、跡々より御座候系図見候処、落聞而已、一向ニ落申事多、不埒ニ御座候故、仍之及申程遂吟味申、草案を先如此認申候、貴様御一覽被成下、思召寄之所御書加可被下候、

- ① 一 浄円院様御事具ニ書申度候、貴様御伺候而御書可被下候、清書之表書申度、子孫迄之ためと存候、中納言様御母堂之趣書申度事候、御伺被成貴様御了簡ニ而草案可被下候、
- ② 一 貴様・六左衛門殿御奉公之品、知行之高ヲモ書付可被下候、
- ③ 一 右之品々書立、其奥ニ古大和守正清・大和守正似・某御奉公之品ヲ書可被申与存候、
- ④ 一 一通り父方之分相済、其奥母方の系図ヲ写置可申候、
- ⑤ 一 諸親類大形死去、拙者書付不申候へハ、先祖之事存たるもの一人も無御座候故に、書付置候而末孫迄残申

* 抹消文字は省略した

度念願ニ御座候、此趣相伺被成下候、思召寄又々可被仰下候、以上、

高齢となった正知は、後半部第五条目に書き記しているように、親類がすでに死去して、自分が書き置かなければ子孫に先祖の家系・事績を伝えられないという、悲壮感、義務感が伝わってくる。さて、前半部趣旨は、「某」（＝自分、正知）の系図を作り直すことを先に浄円院に伝えたが、病気のため延引した。快気したのでこれまで（宝永七年作成力）の系図を見たところ、聞き落とし、書き落としが多く、再度吟味をして「草案」を作成したので、（巨勢十左衛門に）点検と追記を依頼することである。

後半部（一つ書き）では、「浄円院様御事」を「具二書」くこと、「中納言様御母堂之趣」の書き加えを強調している（第一条目）。吉宗の母浄円院について「具二」書いてほしいとのことである。第二条目では、十左衛門とその甥に当たる六左衛門の紀州家奉公についても追記されたいと。注目すべきは第三条目で、吉宗母とその家族について記載した後に、大工頭正清・正以・「某」（正知）の幕府奉公について書くとのことである。紀州藩主の權威の下に自らを位置づけようとしていることが明白である。

以上のように、正徳年間初め頃、中井家はその系譜の内に浄円院家族、つまり吉宗權威を取り込もうとしていたことがわかる。「落聞」、「落申事」とはこのことであつた。また、いうまでもなく、すでに正知と十左衛門は十分に親しい間柄となっている。

さて、この正知（浄覚）の直書を受け取った巨勢十左衛門は、（中井家家来）佃市左衛門あての正徳二年正月一日付けの年頭祝詞に、「旧冬者被入御念主水正様御直書被成下、委細承知仕忝なく奉存候、御申越被成候拙者先祖実名・歳之義、今般別紙認、入御覧候」と書き送っている（A-108-1）。なお、「先祖実名・歳」を記した「別紙」は、「今般」＝近々に認め、お送りするという趣旨である。この「別紙」に該当する史料は見あたらないが、その「追啓」が同年一〇月一五日付けで、十左衛門から正知（浄覚）あてに送られた（A-108-2）。これをみておこう。

〔史料4〕

貴様御系図御書改可被成旨、先達而浄円院殿へ御申聞被成候処、何角無御隙候付御打過、頃日御気分も御快御座候ニ付御書改、夫付可被申越候趣御尤奉存候、浄円院殿へ御草案披見ニ入申候、殊外御満足、貴体様御心尽之段感シ被成候、

① 一 浄円院殿義、御書付置可被成との御事申達候処、此段御女中之事候へハ、何之始末も無之と御座候間、此方

ハ書付可遣義無之御座候間、其段可申遣との事故、書付差越不申候、左様ニ思召可被下候、

② 一 故大和守殿御奉公之品、後大和守殿貴様御伺事御書加へ可被成との事、御尤奉存候、弥御書加御清書被遊、

浄円院殿へも一遍被通候節、拙者共も拝見可仕と奉存候、

③ 一 拙者并同氏六左衛門務之品知行高書付可進由、則別紙書付進之候、

④ 一 貴体様何角御心尽之段奉察候、諸親類中^(様方)二而ハ昔之事覚へ^(不申)奉察候、別而貴体様御忝人之差略奉察

候、拙者共ハ幼少ニ而親死去故、昔之事承不申、被入御念御紙上之趣奉存候、恐惶謹言、

十月十五日

巨勢十左衛門 由利(花押)

浄覚様

尚々、御差越被成候御草案、又被進仕候、以上、

浄円院宛てに届けられた「御草案」をみて、浄円院は「殊外御満足」であった。「貴体様御心尽之段」が感じられたからである(冒頭の傍線部分)。「心尽」とは、中井家の系図に浄円院の家族が書き込まれていたこととみられる。

このほか浄円院の意向が箇条書きで記されている。要点を記しておこう。まず浄円院に關すること記録しておくべきことはないかとの質問に対し、浄円院は「御女中之事候へハ、何之始末も無之」と返答している(第一条目)。以前のことは一切触れない、明かさないという意志が窺える。次に中井正清・正以の木工頭奉公についての追記清

書(正知筆)を浄円院に「一遍」⁽¹²⁾ 見せるとのことである(第二条目)。また、中井家「諸親類中」では「昔之事」を覚えてゐる者がいないが、十左衛門も「拙者共ハ幼少ニ而親死去故、昔之事承不申」と記している(第四条目)。父利清は寛文一二年に死去しており、父については、母(冷香院)が話さない限り限り浄円院・十左衛門が知らないのは当然である。一七世紀半ば頃、中井家・巨勢家(浪人)の間は疎遠になっていたとみられるが、正知は浄円院や十左衛門が家系・家譜情報を知っている可能性があると幻想を持ち、過大な期待を持っていたようにみうけられる。⁽¹³⁾

十左衛門と(甥)六左衛門の紀州藩での奉公内容については次に別紙にその詳細が記され、送り届けられたが(第三条目)、他藩内のことはこのように書き送らないと伝わらなかった。⁽¹⁴⁾ この時点までは紀州藩での両人の奉公を中井家は掌握していなかった(京都町奉行所へ届ける親類書には記されていなかった)。なお、六左衛門の父勘左衛門の存在については中井家の念頭になかった。このような状態が正徳年間の両者の関係であった。

十左衛門は上記「追啓」と同日の「辰十月十五日」付けで、次のような兄勘左衛門忠善、その子六左衛門至信、自分に関する紀州藩での勤書(A-1-d-8(3))を送った。辰は正徳二年(一七一二)である。

[史料5]

巨勢勘左衛門忠善

- 一元禄七年戊十二月近習番ニ被召出、宛米八拾石拝領、
- 一同丑ノ年八月清溪院殿着領具足預り勤ル、
- 一同寅年六月為加増地方二百石拝領仕候、
- 一同卯年五月十日病死仕候、

巨勢六左衛門至信

- 一元禄十二年卯九月親勘左衛門跡目、幼少ニ付拾人扶持拝領、

一宝永七年寅五月為加増地方三百石拝領、奥小姓務申候、以上、

巨勢十左衛門由利

一元禄二年巳六月近習番ニ被召出、蔵米六拾石拝領、

一同寅年二月奥之番務ル、

一同卯年六月清溪院殿着領具足預リ

一同辰年二月為加増地方式百石拝領、徒頭之格相勤候、

(三事項中略)

一同(宝永)七年寅五月為加増都合千石拝領、大番頭格ニ務ル、

以上、

これらの根拠となる任命書はそれぞれが保有し、それを写して勤書を作成し、必要に応じて提出した。紀州藩の人事記録と合致する性格の書類である。いくつか指摘しておこう。冒頭に示した『寛政重修諸家譜』の記載では勘左衛門が兄で、十左衛門が弟であるが、紀州藩への出仕は十左衛門が元禄二年(一六八九)、兄勘左衛門は同七年である。弟が先である。この点については後述する。何れも最初は近習番であり、宛米は兄八〇石、弟六〇石となっている。この点では長幼の序が保たれている。

また勘左衛門は元禄一二年(卯、一六九九)に病死し、六左衛門が後目を継いだとある。旧稿では宝永七年(一七一〇)の「分限帳」に「御小姓」「巨勢勘左衛門」と記録されていた。これを根拠に元禄一二年死去(寛政一一年百回忌)の諦岳院を利清と推定したが、この勤書が正しいとすれば、諦岳院は勘左衛門ということになる。

しかし、旧説の史料根拠とした「分限帳」は天保一〇年(一八三九)の写であった。『寛政重修諸家譜』によると、六左衛門が勘左衛門を名乗ったことはないが、幼名に「勘太郎」が見える。「勘左衛門」のくずし字表記は「勘太

郎」のそれと酷似している。この転記の際の誤記が事実であれば宝永七年頃の生きていたのは六左衛門となり、矛盾は解消される。筆者の旧説は数少ない史料から立論しているが、中井家文書の出現によって、転記ミスを前提とした新説が成立する。こちらの方が妥当であろう。¹⁵⁾

(3) 浄円院の浄覚見舞い状

浄円院から浄覚(正知)の病氣を見舞った書状(A-2-a-76(10))が残されている。浄円院自筆の文書はこれが唯一であろう。全文を紹介しておく。

「史料6」

なよりの一色被下かたしけなく、今二くなくさ^(慰)ミニいたし、一入くかたしけなくそんしまいらせ候、
かへすく次第二ひへくとなり候ま、すいふん御さハリなく、さやう二御やうしやう可被成候、ここ^(養生)
元所ろうにて候へ共ふしにてくらしまいらせ候ま、御心やすく存し可被下候、十左衛門方へ御懇の御こと^(無事)
つて申聞せまいらせ候へハ、忝くよくく申進しけれ候へと申まいらせ候、めてたくかしく、

跡月廿二日付にて御ふミ被下かたしけなくそんしまいらせ候、まつくその御地清氣候にて、上々様方御機嫌よくならせられ候、御同前二御めて度かたしけなくまいらせ候、

中納言様二も御機嫌よく御さなされ候との御左右さいく御さ候て御めてたくまいらせ候、浄覚さまニハ此間少々御持病氣に御さ被成候よし、御年寄の御事二御さ候へハいか、と、御心元なくそんしまいらせ候処ニ、廿日付にておかる殿より御文被下、少々御快御さなされ候との御事にて、御同前二悦まいらせ候、時分からよほと御す、しくも成まいらせ候、なを御さハリなく御するくと御ほんふくのやうニと念しまいらせ候御事二御さ候、御手前さま御氣色も御かハリ被成候御事も御さなされす候よし、御氣のとくに存まいらせ候、さりなが

ら暑氣二も御さハリの御事も、御さなされす候との御事、うれしくそんしまいらせ候、随分御心なかくご養し^(長)
やう可被成候、さやう二御さ候へハめてたくかし、
九月七日 御返事

浄円院お

中井源八郎さま 申給へ

この書状は和歌山の浄円院が京都の中井源八郎(正雄)にあて、同居父正知(浄覚)の病氣を見舞い、九月の残る暑氣への対応、長期療養、回復を求めるという主旨である。宛名の源八郎は正知の子供で、貞享二年(一六八五)に所司代の代替わり時に参府して御目見している。元禄六年(一六九三)には京都所司代小笠原佐渡守長重を通じて老中から拾五人扶持が与えられ(元禄一二年由緒書、A-1-a-6(3))、当時正知の跡取りとして活躍していた¹⁶⁾。

この書状の年代は何時頃と推定できるか。前述のように、正知は病氣が回復して正徳二年頃系図編纂に取りかかったが、すでに高齢であった。文中に「御年寄の御事二御さ候」「いか、と、御心元なく」とある。この正知は正徳五年(一七一五)に死去しているが、この病氣は、正徳二年以前のことか、正徳五年に近い時期か。

この書状では、「中納言」(吉宗)について江戸から紀州浄円院へ「御左右」を伝える文章となっており、吉宗江戸在府と見られる。吉宗は宝永七年(一七一〇)九月と正徳二年(一七一二)九月には国元(和歌山)におり、両年は除かれる。さらに正徳元年には浄覚が元氣に編纂事業に従事しているのでこれも除くと、宝永七年頃の病氣時、同三年、同四年が考えられる。さらに浄円院が十左衛門に「御懇の御ことにて申聞せまいらせ」(傍線部)ているのは上述の巨勢方系譜情報の提供ではないかと見られ、正徳二年以降、つまり同三年、同四年の九月ではないかと推定される。正徳三年頃としておく。ちなみに、文中「上々様」は中井家の当主正知と源八郎をさすと見られ、藩主吉宗より上位に置かれていることに留意しておこう。

この手紙で注目されるのは、浄円院が正知(浄覚)の病氣を大変氣遣っていることである。浄円院の城中奉公、吉

宗出産以前は疎遠であったが、ある時点で血縁が判明し、交流が始まった。病氣見舞いの親密度は先に述べた元禄一一、一二年頃の、正知の浄円院「姉分」証言をぬきには理解できないであろう。浄円院にとって正知は大恩人であった。

以上のように、本章では、吉宗の誕生、成長とともに、一七世紀末頃より中井家との姻戚関係を梃子に、中井家との交流を深めつつ、浄円院家族は紀州藩の中で新しい地位を確保したことを見た。

【3】浄円院と巨勢家の成立

(1) 一七世紀後半期の浄円院家族

中井家が浄円院・十左衛門を通じて、巨勢家族の紀州藩内諸情報をえたことをみたが、次に利清の家族について検討することにする。先に掲げた文化年間作成の系図(六左衛門至信家系)の内、かなり長いが、利清の子と孫について部分を下記に引用する(系図3のつづき)。

〈系図4〉

利清

生国山城、八左衛門

— 女子紋

母 壺井源兵衛義高女

明暦二丙申年御出生、紀州大守從二位権大納言光貞卿二御奉任、御腹二御子從三位中納言吉宗卿御誕生、
正徳六丙申年

吉宗公被任將軍、江都御本丸工御移徙、依之享保三戊戌年從紀州若山御下向、二之丸二御住居、同十一年丙午年六月九日御逝去、御寿七十一歳、江都上野東叡山寛永寺工御葬送、(中略)、御法号淨円院殿禪台知鏡大姉

忠善 生国山城、勘左衛門

母 同上

妻 西川四郎右衛門名乗女紀伊殿不詳家臣(中略)

万治元戊戌年出生、洛陽二浪居、元禄七甲戌年月日不詳紀伊殿工被召出御近習二相成、御蔵米賜八十石、同十丁丑年八月日不詳光貞卿御着類之御具足頭二転、同十一戊寅年六月日不詳有加恩賜地方二百石、同十二乙卯年五月十日死、四十二歳、紀伊国若山大立寺二葬、法名諱岳院法譽性道義快居士

女 万治二己亥年出生、天和四甲子年二月九日死、二十六歳、法名本寂栄照信女、洛陽長香寺二葬

母 同上

由利 生国山城、十左衛門、丹波守

母 同上

妻 中野七郎兵衛当恒紀伊殿家臣女

寛文三癸卯年出生、元禄二己巳年六月日不詳紀伊殿工被召出近習番二相成、御蔵米六十石、同十一戊寅年二月日不詳御奥之番二転、同十二己酉年六月日不詳光貞卿御着類之御具足預二転、同十三庚辰年二月日不詳御徒頭二転、有加恩、賜地方二百石、(中略)宝永七年庚寅年五月不詳大番頭二転、加恩賜五百石合千石ヲ領ス、吉宗公御代享保三戊戌年四月十五日淨円院様御供ニテ紀州若山出立、五月朔日江戸紀伊殿糒町屋敷工着、(中略)知行賜五千石、同月二十三日西丸下二而屋敷拝領、同年十二月十八日被叙從五位下任丹波守、(中略)

同四己亥年正月十五日知行三河国加茂郡碧海郡之内ニ而拝領、同年四月八日死 五十七歳、江都西之窪大養寺ニ葬、法名善龍院到譽直心淨微大居士

利啓 生国紀伊、善之助、十左衛門、大和守

(母・妻中略) 同姓之祖也

至信 生国紀伊、勘太郎、六左衛門、伊豆守、縫殿頭亦伊豆守、隱居名道任

(母・妻中略)

元禄九丙子年正月二十日出生、同十二己卯年五月十日父勘左衛門就病死、同年^{月日}就幼年十人扶持賜り、家督被仰付、宝永七庚寅年六月^{日不詳}十五歳ニ而御小姓被仰付、知行賜三百石、(中略)正徳二壬辰年三月(中略)六

左衛門ト改名

吉宗公御代享保三戊戌年四月十五日浄円院様御供ニテ、紀州若山出立、同五月朔日江戸紀伊殿糺町屋敷エ着、(中略)御小納戸被仰付、知行賜千石、同月二十三日西丸下大久保長門守上知、同姓由利ト兩人ニ賜り、同年十二月十八日布衣被仰付、同四己亥年正月十五日知行三河国宝飯郡西浦村戸金村形原村之内ニテ拝領、同年十二月二十一日紀州南龍院殿来子正月十日就五十回御忌御名代参拝被仰付、翌二十二日被叙従五位、任伊豆守、(中略)御加恩賜千石、同年十二月晦日御加増地三河国宝飯郡形原村・碧海郡川嶋村之内ニテ拝領、(中略)同年六月九日浄円院様就御逝去、御遺物御道具品々御形身金百両拝領、(中略)宝暦四甲戌年五月十二日死、五十九歳、江都西之窪大養寺ニ葬、法名高隆院譽義亨道任大居士、

この系図では、十左衛門子利啓の記事は簡素で、一方勘左衛門子至信の記事は重厚詳細で、以降は同家系のみ文

化年間迄記されている。つまりこの家系図は近世後期に至る巨勢至信家と中井家の交流の中で作成されたものと理解されるが、利清の家系や至信までの記事は、先に見た正徳二年頃の正知（浄覚）の系図編纂事業の成果に負っていると思われる。先に見た勤書は、傍線部①②③（仕官の始まり、以降の職務、昇進過程）の記載にそのまま反映している。吉宗誕生以降は、浄円院巨勢家族の側に系譜等の情報が存在した。中井家はこれを取り込み、家系図を膨らませたのである。

さて、利清の子は女子紋・忠善勘左衛門・女子・由利十左衛門の四人で、その母はいずれも壺井源兵衛義高女となっている。『寛政重修諸家譜』では中二人（長男勘左衛門と次女）の母については無記載であった。旧稿では、挟み挟まれる二組は母が異なり、特殊な事情を想定せざるを得なかったが、今回の記述が事実を反映しているとすれば、記されなかっただけということになる。では、何故記されなかったか、この点が問題となる。

そこで、『寛政重修諸家譜』の記載を再点検すると以下のことが確認できる。すなわち、巨勢利清の四子の内、「女子」（長女、紋）の箇所「母は大覚寺宮の家司壺井源兵衛義高が女」とあり、他の三子の母については一切記されていない（第二十、三三二頁）。普通であれば詳細は記されないが、（幕府と関わりの深い）將軍吉宗の母については、その母の出自や本人の没年、戒名等までが詳細に記された。

ついで、利清の次男由利について「母は大覚寺宮の家司壺井源兵衛義高が女」と記されているのは、四子が横並びに列挙されている箇所ではなく、項を改めた箇所である。再度「巨勢」家が立項され、「由利」の項に母に関する記述など詳細な記載がある（第二十、三三二頁）。十左衛門が幕臣となったことにより同書の記載対象となり、分家筋ゆえ立項されているのである。

一方、本家筋の利清長男勘左衛門は利清の後継として記され、立項されていない。四子横並びの箇所では簡略な記載しかない。これは勘左衛門が紀州藩士ではあったが、幕臣でなかったことによる。いわば系図上の中継ぎであ

ったから母の記載はなかったのであろう。「女子」(次女)については全て省略されたとみられる。以上の事情から結果として、「女子」(紋)と十左衛門の箇所に「壺井源兵衛義高が女」と記されることになった。兄弟姉妹四子の中の特別な事情の反映ではないと考えられる。『寛政重修諸家譜』編集の観点からの分析が必要であるにも関わらず、記載の形式に目を奪われ、誤った推論を引き出した。

上記の再検討から四子に関する記載を事実とみる条件が整った。そこで系図4にもどり、その記載を委しく検討し、四子の家族状況、生涯についてみておこう。

四子の誕生はそれぞれ明暦二年(一六五六)、万治元年(一六五八)、万治二年、寛文三年(一六六三)であり、言うまでもなく父利清の存命期間内である。父利清が没した寛文一二年(一六七二)、長女紋は一七歳、勘左衛門は一五歳、次女は一四歳、十左衛門は一〇歳であった。この内、勘左衛門は元禄七年(一六九四)に紀州藩に仕官し、同一二年に和歌山で死去して和歌山城下大立寺に葬られる。第十左衛門が元禄二年に仕官しているが、五年後からである。この事情をどう考えるか。

旧説で推論したように、浄円院と母はある時点で京都から和歌山へ移動している。十左衛門は母に伴って和歌山へ移動したが、兄勘左衛門は伴っていないかった。兄弟の仕官の年代的ずれは、弟が仕官した後、京都から呼び寄せられ仕官したと解釈することができる。浄円院(紋)が藩主家へ女中奉公し、男子吉宗が誕生し初めて十左衛門の近習番仕官が可能となった。それは吉宗が五、六歳に成長し、姉弟の紀州藩内の地位が安定した頃、元禄二年によりやく実現したと理解される。十左衛門兄勘左衛門が仕官できた元禄七年頃、吉宗は新之助と改名し、藩主光貞から期待されるようになっていく。浄円院は(おそらく母の意向により)京都においてきた弟勘左衛門を和歌山に呼び寄せることができ、末弟と同じ近習番に仕官させることができた(当時三七歳)。浄円院は藩主光貞に、実はもう一人弟が…というようなことで仕官を願ったのであろう。

ところで、次女は天和四年（一六八四）に死去し、京都の長香寺に葬られている。この妹は和歌山へ呼び寄せられることがなかったとみられる。浄円院と母と弟が京都を出たのはいつのことであろうか。利清の死去後、生活は困窮を深め、京都を欠落し、家族は離散した。熊野参詣に救いを求めたのかも知れない。延宝二年（一六七四）同三年にかけて西日本では凶作、飢饉に見舞われた。⁽¹⁷⁾ 長女紋⁽¹⁸⁾後の浄円院は躰が大きく、手助けとした。末っ子は手放せず、間の弟妹は誰かに預けたのであろう。次女はその時（延宝二年とすれば、一六歳）から二六歳まで一〇年間程母無しで、兄勘左衛門と二人であった。京都の長香寺は中井家の菩提寺であり、先に父が葬られている。そこへ妹を葬ったのは勘左衛門（当時二九歳）であらう。『寛政重修諸家譜』にこのような事実は記載されるべくもなかった。ただ「女子」とのみ、その存在は記されている。

（2）浄円院系譜の特質

さて、長男勘左衛門は元禄七年に仕官し、その二年後に跡継ぎの六左衛門至信が生まれている。おそらく仕官直後に妻を娶ったのであろう。三八、九歳にして初めて家族を形成した。浄円院の甥であり、吉宗の従兄弟に当たる六左衛門は、吉宗が將軍就位直後、浄円院に伴って江戸へ行き、享保三年（一七一八）に千石取・小納戸役に取り立てられ、幕臣となった。

一方、十左衛門の方は浄円院付きで江戸へ随行し、五千石取の幕臣となった。従五位下丹波守に任じられている。同人はその直後に死去するが、跡継ぎの利啓は遺跡五千石を継ぐとともに奥詰となり、その後昇進した。このようにして、浄円院の家族から二家（本家筋・分家筋）旗本が生まれた。これは近世巨勢家の成立である。浄円院の母と浄円院の兄弟は女性を家長とした直系家族であった。ただし、京都に一人の女性を放置したままであるが、長女から始まってこの家族の紀州藩への仕官（奉公）が始まり、新しく一つの武家家族が形成された。浄円院の女中奉公、

藩主お手付き、男子誕生がその契機であり、その後の兄弟の仕官活動が新武家家族の形成につながった。未婚女性とはいえ、奉公開始において武家家族の形成を志望する（願望する）契機は孕まれて居らず、上記の家族形成は偶然の結果である。

振り返って、浄円院の姻戚を遡れば、大和巨勢氏⁽¹⁹⁾の流れを汲む正吉の子正清が、中井を名乗り、大工頭として慶長一四年（一六〇九）徳川家康から千石の知行を受けた。正吉弟正利子⁽²⁰⁾の利次は慶長一五年に従五位下信濃守に任じられ、大工集団の有力な一員と位置づけられている。このような系譜があったものの、利次子利盛は生活拠点を大和から山城（京都）に移し、かつ「洛陽ニ浪居」し、その子利清（八左衛門、浄円院父）も「洛陽ニ浪居」し、さらに家名中井を名乗らないようになっている。ここで「浪居」というのは、武家へ仕官しないこと、もしくは大工頭中井家に統率される集団に属しないと理解される。中井家姻戚関係によって保障される職分から離れ、如何にして家族を養い生活していたのであろうか。大工頭の身分的位置付けは武家か匠（職人）か難しいが、洛陽「浪居」者は明らかに町人身分に属する。いずれかの町の住民であったと推測される。母（後の冷香院）の出自は「壺井源兵衛義高女」とあり、『寛政重修諸家譜』にはさらに「大覚寺の宮家司」と書き添えられている。しかし、これは母の証言のみで、傍証する史料は何もなく、確定できない。

以上のように、紀州和歌山へ移動する前の、浄円院を含む家族は町人身分であった。しかも、父の死去の上には何かのきっかけ（おそらく延宝飢饉）が重なり、その町から離脱せざるを得なくなり、浄円院を含む家族は貧困により分解してしまった。母と浄円院と弟の三人は町人身分を喪失し、紀州への途上、あるいは紀伊国（紀伊徳川家領内）において、移動する途中の彼等を保護する身分的制度はなかった。順礼の姿を取って居れば順礼者、道心者であった。行き倒れにも通じる移動弱者であった。⁽²¹⁾

むすびに

享保四年（一七一九）四月に巨勢十左衛門由利が死去し、善之助利啓（大和守）が跡を継いだが、それより少し後の享保八年、利啓は七月十一日付け中井主水（正豊、正知養子）への手紙で、「拙者共家ノ紋ノ事、只今ハ御存ノ通ノ紋所付来」っているが「今ノ紋所ハ中古付候紋」なので、「元来巨勢ノ紋所ハなににて御座候哉」と尋ねた。「家紋正シキヲ承置申度」と述べている（A-16-11）。これに対し、中井主水は養父浄覚（正知）や実父彦仙から聞いたところを丁寧返信し、巨勢家伝来の家紋について教示している。浄円院の弟と甥が新しく旗本に取り立てられ、新巨勢二家が形成されたが、戦国・近世初期の大和巨勢家の伝統が継承されようとしている。

家紋の伝統を引き継ぐとしているが、しかし、一旦分解を遂げ、巨勢分家は消滅したことも事実である。浄円院の父利清の家はいったん崩壊した。その家Ⅱ中井分家は、利清の妻Ⅱ浄円院の母が京都を欠落した時点で崩壊の道を歩んだ。ただし、紀州の寺院や町家の救済で破片家族は偶然にも生存を確保することが出来た。また、すぐに京都の長男・次女と連絡が付いて、血縁関係を継続したか否かは不詳であり、吉宗誕生以前に亡くなった次女を母（冷香院）は引き取っていない。弔いの寺は京都と紀州に分かれた。

その後、幸いにして吉宗が誕生して、男子を生んだ功績で、次男、遅れて長男を仕官させることが出来た。長男は紀州の冷香院家族に復帰したが、これは完全に偶然の結果であった。

すなわち、浄円院の家族は、その女性性と藩主男子出産という偶然的契機を媒介にした新巨勢家を形成する道を歩み始めた。旗本巨勢家の取立については浄円院の系譜とこのような流れを正確にみておく必要がある。

さらに付言すれば、大工頭中井家にとっても、浄円院・吉宗との姻戚関係は地位上昇、家族の奉公等、生存にと

って有利であり、歓迎され、活用された。將軍就任以降は浄円院および新巨勢二家と中井家は相互に交流を深め、扶助・支援関係を形成した。⁽²⁰⁾

もう一点、旧説で誤りを含んだことと関連するが、『寛政重修諸家譜』における浄円院兄弟姉妹二名の母親名の省略は、この家族(吉宗祖母家族)の流浪事実につながる要素を省いたことによるものであろう。そのため不要な混乱が生じた。また冷香院・浄円院は流浪事実を一切語っておらず、なかったことになっている。このような結果記載のみでは歴史の事実、ダイナミックスを捉えることができない。このことを浄円院家族の歴史は示している。

注

(1) 拙稿「徳川吉宗の母浄円院の家族―幕臣巨勢氏の始原―」、『紀州経済史文化史研究所紀要』第38号、二〇一七年二月。

(2) 中井家の文書群の大半は「大工頭中井家関係資料」として平成二三年(二〇一一)六月、国の重要文化財に指定され、現在「大阪くらしの今昔館」に寄託され、保管されている。

(3) 中井信彦・高橋正彦「史料紹介 大工頭中井家文書(一)」、三田史学会『史学』37(1)一九六四―〇六。

(4) 高橋正彦「大工頭中井家文書」(一九八三年、慶応通信刊)の解説。なお、中井正清については横田冬彦「中井正清棟梁たちを率いた大工頭」(講座 日本技術の社会史 別巻1、一九八六)も参照。

(5) この法名記載の系図は、国指定重要文化財「大工頭中井家関係資料目録」(文化庁文化財部美術学会課、平成二三年三月)によると「中井家文書父方系図」(浄慶・正徳)・母方系図」となっている。なお本稿で引用する中井家文書の史料番号は川上貢編『幕府京都大工頭中井家文書目録―長香寺寄託分―』(昭和五八年三月)掲載の番号である。

(6) 城戸久解題「中井家系譜」(私家版、名古屋工業大学、昭和二六年七月)に記された文化一〇年(一八二三)「中井家系譜」には、中井正徳に關し、「孫十郎、以云、後彦仙」、慶安元年(一六四八)生まれ、元禄一四年(一七〇一)五四歳没とある。寛文一〇年(一六七〇)

には二三歳であり、同人の署名と理解しうる。谷直樹氏のご教示による。なお谷直樹『中井家大工支配の研究』（思文閣出版、一九九二年）三四頁の「中井家系図」を参照した。

(7) 近世後期に法名・没年・年齢を書き出した記録が残されている(A-1-e-2-(2))。これは近世前期作成の記録に代々書き足したものであろう。

(8) 拙稿「紀州時代吉宗史の再構成——『南紀徳川史』歴史像の克服——」、「『紀州経済史文化史研究所紀要』第37号、二〇一六年二月。

(9) 前掲注(1) 拙稿論文。

(10) 正知の実父正純は承応三年(一六五四)に死去しており、祖父Ⅱ正純と理解することもできない。誤解であらう。

(11) 婚姻は行われたが、その後離縁して、大奥へ仕え、老女となっている(『寛政重修諸家譜』第二十、三五四頁)。

(12) 正知の「倅」として寛文一三年(一六七三)〜延宝五年(一六七七)の記事には「長五郎」が見え、貞享二年(一六八二)〜元禄一二年(一六九九)の記事に「源八郎」が見える。成長に伴い改名したものと理解しておく。

(13) 浄円院の母冷香院が何かを知っている可能性はあり、これを期待したのであろうか。なお、後述するように京都離脱が延宝二、三年(一六七四、五)であれば、浄円院はすでに一六、七歳であり、利清家族については種々記憶していたであろうが、一切の記憶を封印した。ただし本家について詳細は知らないであらう。

(14) 「紀州代々覚」(吉宗以前の藩主官職名、法名の書出)が中井家文書中に残されている(A1-d-8-(4))。

(15) 「分限帳」の成立時期について宝永六年末〜同七年六月としたが、十左衛門の千石への加増が宝永七年五月であるから、宝永七年五月〜六月とさらに推定幅が縮まる。

(16) 「御用向見習」で「御扶持方」も下されていたが、後年「中症」(中風、脳卒中による半身不随)を煩い、引退し、後に「松岳」と称した(A-1-d-15(1))。六代目(系図1)予定者であった。

(17) 京都の延宝飢饉については菅原憲二「近世京都の非人——与次郎をめぐる——」(『日本史研究』181、一九七七年)に、延宝三年

(一六七五) 春以来の京都市中の貧人施行の状況が分析されている。

(18) 寛永寺埋葬の遺骨から「骨もたくましく、極めて健康」だったことが証明されている(馬場悠男「徳川將軍親族遺骨の研究」一三七頁、NHKカルチャーラジオ「科学と人間」第12回、『私たちはどこからきたのか』所載)。子供時分から頑丈であったとみられる。

(19) 戦国期大和の土豪万歳氏に属した巨勢正範に淵源を持つと伝える(巨勢家譜、A1-e1)。

(20) 「巨勢家譜」(A1-e1)の正利の箇所「一生浪人」とある。

(21) 往来手形を発行する制度は未だ整って居らず、仮にそのような慣行があったとしてもその保護対象には入らないであろう。ただし現実的な保護・救済は途中立ち寄った大立寺や養源寺で施された。

(22) 一橋宗尹を生んだお梅(深心院)は、一七〇四年(元禄一七)から和歌山城奥で子供時分から浄円院に奉公していた女性で、一七一六年(享保元)江戸城本丸へお供した。その弟竹本新十郎は京都で中井家の支援を受け御家人となった。

(謝辞)

今般、重要文化財「大工頭中井家関係資料」の閲覧、利用については所蔵者中井正知氏・中井正純氏のご理解を得、同文書を分析することができた。記して感謝の意を表します。また「大阪くらしの今昔館」館長(大阪市立大学名誉教授)谷直樹氏のご協力を得、種々ご配慮いただいた。本稿の成果は中井両氏、谷館長のご支援の賜物である。同家文書の所在、目録等については京都大学名誉教授(当時同大学院教授)横田冬彦氏から種々御教示を得た。また浄円院書状の解説に当たっては九州大学基幹教育院教授福田千鶴氏から多大なるご教示を得た。併せて謝意を表します。